

6. 小学生のためのサマーカレッジ2014

◎参加人数 68名(学生)

◎活動の趣旨

宮城学院女子大学(以下、宮城学院)では、多くのボランティア活動を行っており、その一つとして子ども支援があげられます。教育に関わる学科が多いため、多くの子ども支援ボランティアが、その特徴である継続性を意識して活動しています。その中でも、サマーカレッジが担う役割は、「総合性・重層性」です。単なる学習支援にとどまらず、学習支援の核となる教育の新たな側面として、音楽・食・遊び・アート・自然とのふれあいを取り入れ、融合させることで、教育の質の向上を目指しています。

サマーカレッジの基となるのは、レジャョ・エミリア市の教育実践です。「管理しない、怒らない、命令しない、禁止しない」こうした点を意識しながら、学生・教員がサポーター、主役は子どもたちであるプログラムを作り上げてきました。今年度で4回目、毎年多くの学生が関わるボランティアのため、今回は特にサマーカレッジの核となるこの考えを学生全員に周知させることを意識しました。

◎今年度の活動内容

今年度は1月下旬から活動を開始しました。サマーカレッジは、企画・運営の殆どを学生が行うため、まず、プログラムの中心となるメンバーを募集し、集まったメンバーで大まかな企画・4月から始まる新メンバー募集の計画を考えました。

新メンバーが揃った5月には、全体説明会を開き、そこから表現講座係、遊歩道係、講座係、遊び係、食事係、記録係に分かれて活動しました。今年度の表現講座は、講師に東北文教大学の臨床美術の先生である河合規仁先生をお呼びしました。「感じた世界を表現する」をテーマに、子どもたちには、木々の息吹や、虫たちの営みなど、キャンパス内の遊歩道を散策して見つけた“はてな?”や“きれい”から、

様々な森のイメージをアートへと表現してもらいました。表現講座係は、河合先生との打合せを重ね、準備を行いました。実際にうちわを作ってみたり、わかりやすい説明の仕方や学生側の声掛けの仕方を考えたりしました。遊歩道係は、キャンパス内の遊歩道を事前に歩き、子どもが安全に歩くことができる道順を考えたり、声掛けや緊急時の対応等を考えたりしました。講座係は、今年度は二日目が午前・午後と講座の時間になったので、そのチーム分け、先生方との打合せを行いました。講座は、田中一裕先生(生態学)、板橋夏樹先生(理科教育学)、友野聡子先生(社会心理学)、平本福子先生(調理学)、西浦和樹(教育心理学)、松村光太郎先生(雪氷学)、J.M.サトウ先生(英語教育学)、菊池恭江先生(弦楽器実技)といった先生方にご協力いただきました。遊び係は、昼食後の遊びの時間のプログラム作りをしました。どんな遊びを用意すれば子どもたちは楽しめるのか、そのためにどんな準備をしなければいけないのか、考えながら活動しました。食事係は、2日間の昼食とおやつメニューを考えました。子どもが喜んで食べてくれるようなメニューの考案、アレルギーを持っている子どももいるのでそうした子どもへの別メニューの対応、他にも、森のレストランの装飾を行いました。記録係は、2日間の子どもたちと学生たちの活動の様子を写真と映像で記録しました。その後、映像を編集し、20分程度の映像にまとめる作業を行いました。

当日は天候に恵まれ、サマーカレッジ2014は多くの子どもたちの笑顔に囲まれて無事終わることができました。

◎今年度の振り返り

今年度特に感じたことは、毎年少しずつサマーカレッジが成長しているということです。私は2回目から参加していますが、毎年課題があがり、それを次年度のサマーカレッジで解決しようと学生が立ち

6. 小学生のためのサマーカレッジ2014

上がります。今年度はそうした反省を生かして、サマーカレッジに関わる学生全員に、なぜサマーカレッジが出来たのか、という点からしっかりと共有し、ひとりひとりがこのボランティアに想いを持って参加できるように意識しました。そのかいあって、今年度は学生ひとりひとりがサマーカレッジ実行委員の一員として、意識して活動することができていたと思います。

しかし、課題もたくさんありました。サマーカレッジは元々大規模なボランティアで、事前に準備することも多く、学生にとっては大きな負担となります。その負担を乗り越えられるような成果が学生の中に生まれなければ、達成感だけではこのサマーカレッジは続きません。学生はボランティアスタッフですが、彼女たちが過ごす時間はタダではなく、サマーカレッジを作り上げる何でも係として活動させては、学びや得るものも変わってきます。大規模なボランティアだからこそ、そこで動く学生にも寄り添っていく必要が、これからはあると思います。

また、学生主体の企画となったのが昨年度からということで、先生方と学生の仕事の線引きがまだまだ甘かったと感じます。どこまで学生が動けば良いのか、お互いの意見をすり合わせる時間が足りなかったと感じました。

来年度に向けて、今度は学生がもっと熱意をもってサマーカレッジを良くしていく必要があると感じます。こんなに大規模な学生主体の企画ができるのは、サマーカレッジくらいしかないと思います。だからこそ、関わる学生たちが、ここはもっと良くなるというように活動に熱意をもって動くことができれば、サマーカレッジは簡単に良くなっていくと思います。そうした熱意の引き出し方が今後の学生の課題だと感じます。



遊歩道散策



表現講座の様子



菊池恭江先生弦楽器体験の様子